

実況中継「土曜講座」

第7号

2026年9月30日発行

市川学園 9 月 5 日の土曜講座 於 国枝記念国際ホール

下條信輔先生

『高校生のための心理学・行動科学・認知神経科学入門』



下條信輔先生のご紹介

東京大学文学部心理学科卒業、マサチューセッツ工科大学大学院修了、Ph.D。科学技術振興機構 ERATO 潜在脳機能プロジェクトリーダーなどを歴任。専門は知覚心理学、視覚科学、認知神経科学で、視知覚、感覚間統合、情動と意思決定などをテーマに、Nature、Scienceなどに180本超の論文を公刊。『サブリミナル・マインド』（中公新書）他、著書多数。

主な講義内容の紹介

多くの示唆を与えてくれる講義だった。たとえば、認知科学とスポーツ科学を重ね合わせながら示されたのは、《個人の限界には複数の層・閾値がある》という視点である。スポーツといわゆる受験勉強を単純に同一視することはできないが、自らの限界に挑戦する過程には共通する部分も少なくない。受験に立ち向かう生徒の“限界”の層をわずかにでも広げるにはどんな言葉掛けをするかといのだろう。《潜在的な過程は様々なカタチで顕在化できる》のならば、私たち大人が生徒の潜在的なところを日々ほんの少しずつすぐることに大きな意味があるように思う。

生徒たちを子ども扱いしない講義スライドにも目を見張った。日本神経学会のシンポジウムで使用されたスライドをそのまま用いて講義が進められたのである。その理由として先生は次のようなメッセージを伝えてくださった。

「講義内容は中高生にとってはチンプンカンプンかもしれない。しかしその中から自分の琴線にふれる『漠然とした興味』が湧かなかっただろうか。その『漠然とした興味』を直感的にキャッチすること。『あいまいな方向』でも良いのでその直感を信じること。それがあなたの進路開拓の大切な場面で、あなたを助けてくれるはずだ。」

難解に見えるスライドの中にも、生徒への深い信頼と期待が込められていた。生徒たちの心にも、そのメッセージは確かに届いていたように思う。それは今後、《潜在的なもの》として心の中に残り、いつか《顕在化》してそれぞれの進路や人生の中で花開いていくのではないだろうか。生徒たちの未来が楽しみでならない。

先生は講座の中で生徒に「課題」を投げかけた。正解があるわけではない問いだ。

今これを読んでいるみなさんにもぜひ言語化してみてほしい。先生の「問い」を紹介しておく。

QRを読み込んでみましょう。→



先生は当日、喉の不調を抱えていらっしまった。さらにマイク設備の不備も重なり、大変なご負担をお掛けしてしまったことを心よりお詫び申し上げたい。そのような状況にもかかわらず、最後まで真摯に講義を続けてくださったことに深く感謝している。先生の地声には大きな力があり、マイクを通さないからこそ心に響く言葉もあったように感じられた。この場をお借りして改めて御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

受講レポートから

- ・ 他人の話の中で何か分からないことがあったら、その人に失礼のならない範囲ですぐに軽く調べ、あいまいな内容をなくすという話が心に残った。特に深くではなく、半歩掘り下げることが印象的だった。(中1)



- ・ AIを用いると「本人の自立した思考が得られる」ことはもちろん、高校、大学卒業後に就職し、仮にAIを使用することを許可されたとしても、実際に社会の中で生きていくのはヒトであり、ヒトにしか分からない感情面や、その人の来歴からしか思い浮かばないことがあると考えられるため、私はAIをレポート等の課題で使用すべきではないと思う。(中2)



- ・ 心理学、神経科学、工学、計算科学が組み合わさって心理物理学という学問ができたということが興味深かった。進路には文系か理系のどちらかしかないと思っていましたが、「文系的なテーマを見つけ、理系的にアプローチ」という発想が私にはなく、おもしろいと思った。(中3)

- ・ 現代文の教科書でやったことと同じような内容を扱っていて、理解がスムーズだったし、文章でしか読んでこなかったお話をリアルタイムで研究している方の生の声を聴けるのは、本当に貴重だった。潜在的脳機能は、「潜在的」であるからこそ謎が尽きないテーマで、いくら掘り下げても答えが見つからなそうだった。最終的にはクリエイティビティがカギになるとおっしゃっていて、創造力を養うには「周辺」をよく見るという話がすごく印象に残った。(高1)

- ・ これは私の叔父に言われたことだが、「AIは自分がもう知っていることを確認するために使うもので、完全に知らないことをAIに聞いてそれを鵜呑みにするのは人間としてよくないことだ」ということを伝えた上でAIの使用を許可すると思う。(高2)



- ・ 潜在的心理についてはじめて学んだが、自分が、能動的に意識で行っていると思っていたことが、潜在意識に大いに影響を受けているのは衝撃的だった。AIはタコみたいなものなのかなと思った。(高3)

(文責：：中野 恵介 菅屋 郷子 両先生)